



# マリア様がみてる

～ Cocktail light ～

Raytuel

サークル・クロスロード

# マリア様がみてる

～ Cocktail light ～

もくじ

## Cocktail light

プロローグ	8
聖と景と子犬	16
聖と景とアルバイト	39
聖と景と赤ん坊	71
景と彼氏	94
景と聖と風邪	103

## 白薔薇の行方

白薔薇の行方	141
あ と が き	155

Cocktail light

イラスト／  
赤星  
健次

「ごすっ！」

……。

セミダブルのベッドというのは、シングルより大きくてダブルより小さいという、どっちつかずのサイズのベッドのことで、一人で寝るには充分広いが、二人で寝るには狭いベッドということになる。

私がこの家に来たとき購入したセミダブルのベッドでこの私と一緒に寝るからには、泊まり客はある程度の遠慮を持って、家主に接するべきだと私は思った。

前提条件を先ほど言ったとおり、セミダブルのベッドは二人寝るのに向いてない。が、それでも女の子二人だからなんとか身体を動かす程度の余裕があったのだが――。

こんな狭いベッドの中を恐ろしいほど遠慮もなく、私の右膝の裏をけつ飛ばしてくれた彼女の寝顔を見た。

これがかもしも彼氏であったなら、遠慮なくけつ飛ばし返していただろう。

いや、絶対にお腹をけつ飛ばしてた。

残念ながら私の横で寝ていたのは女の子であったし、寝ているのだから決して故意であるはずがない。右膝の鈍痛ですっかり目を醒ました私に構うことなく、彼女は寝ていた。

その寝ている姿をみると、寝相以外はおしなべて静かで、寝息も聞こえず胸の上下も気を付

けないと分からないくらいだ。初めて彼女の寝顔を見たときは、思わず顔に手をあてて呼吸を確認してしまったこともある。

枕元に置いてある時計に目をやると、まだ起きるには早すぎるが、二度寝するには時間が足りない中途半端な時間に起こされたことが分かり、鳴る前の目覚まし時計のアラームをオフにして、私は起きることにした。

軽く顔を洗う。冷たくなつた水、小窓から覗くまだ薄暗い空模様、日の出が遅くなつているのを感じ、秋が深まっていることを私は感じた。でも気温はファンヒーターを点けるにはまだそれほど寒くはないし、もうしばらくは過ごしやすい朝でありそうだ。

早く起きてしまったのだし、少しは手の込んだ朝食を作っても良いかも知れない。

私は台所に行くのと冷蔵庫を開けて、朝食の材料を手早く出した。

昨夜の残りのご飯をおにぎりにして、ラップをかけて冷凍庫に放り込み、お米を二合研いで炊飯器のスイッチを入れた。その間に胡瓜きゅうりを輪切りにして、短冊切りにした大根をビニール袋に入れてお塩を振りビニール袋の空気を抜いて口を縛り、さらにビニール袋を二重にして床に置く、その上に使わなくなつたまな板を置いて野菜を踏みつけ、その上で調理を続ける。

沸騰したお湯に軽くだしの素を足し、タマネギを切つて入れると、透明になるまで中火で煮込んでいく。卵を二個小皿に割つて入れ、血玉子とか玉子の殻が入ってないか確認して、サラダ油を引いたフライパンの上に流し込む。

熱せられた油に卵の水分が飛ぶ音が台所に響く。表面の白身が固まらない内に、少し水分を足してフライパンに落としぶたをして、火の勢いを弱めて蒸し焼きにし始める。

炊飯器から炊きあがりのアラームが鳴る。それを合図にフライパンに落としたりした蓋を取り、フライ返しで半分に黄身を潰さないように二つに割ってお皿に盛る。

透明になったタマネギを確認すると火を止め、お味噌を入れて居間に置いた鍋敷きに置く。炊飯器のふたを開け、炊きあがりの湯気を被りながら、しゃもじで内釜の中の真つ白なご飯を切り、居間へ持っていった。

まな板したのビニール袋から、胡瓜と白菜の今漬けをお皿に盛り、テーブルの上に置いて、茶碗とお椀を準備する。

さて……。

自分一人だけならこれで完成なのではあるが、あいにく今日は……今日も客がいる。

真つ白な枕カバーの上に、カフェオーレをこぼし流したような髪の毛。その髪の毛の持ち主は寝息も立てずまだ眠り続けている。

そのまま放っておけば永遠に寝ていそうな安らかな寝顔。

「朝ご飯、出来たわよ」

とはいえこのまま安らかな眠りに置いていく訳にもいかず、私は声をかけた。

「……ん……」

彼女は冬眠から目覚めたばかりのクマだつて、もう少しマシな顔をしてるだろう表情で、のっそりとベッドから掛け布団ごと滑り降りた。

「おはよう」

私の声を聞いてか聞かずか、

「……いただきます」

彼女はそのままモソモソとテーブル前に座った。

「顔、洗ってらっしゃい」

寝ぼけ顔の彼女は、口を尖らせて文句を言う。

「……お味噌汁が冷める」

「冷めない」

少々語気を荒げると、彼女は渋々と洗面所へ向かった。

私は洗面所から聞こえる水の音を聞きながら、ご飯とお味噌汁をよそって彼女の到着を待った。

「おはよう、朝から随分と凝ったメニューだね」

「早く目が覚めたのよ」

彼女は私のテーブルを挟んで向かいに座り、

「頂きます……何、怖い夢でも見たの？」

と言いながらお味噌汁を静かにすすった。

「近い将来、私が右膝の痛みで歩けなくなったらアナタのせいだから」

「？」

不思議そうな顔をする彼女をよそに、私も朝食を食べ始めた。

「朝ご飯終わったら、ベッド片付けて置いてね」

「うん」

一部屋しかない家でベッドというのは、全体的に手狭になる原因であるけれど、私はあえて持ち込んだ。一人暮らしならソファベッドであれば、十分に生活の広さを確保出来と思ったからだ。

自分でシングルベッドを買おうと思ったら、とある人から海外にしかないセミダブルのソファベッドを買ってしまった。そのおかげでシングルベッドに二人で寝なくて済んでいるため、今では重宝しているけれど。

食事も歯磨きも食器の片づけも終わり、私は鏡台の前で軽く化粧を始める。

化粧と言っても大学に行くだけだから、軽くファンデーションを塗って、薄いリップを塗るだけの簡単なものだ。

「お化粧なんかしなくても綺麗なのに」

正直、化粧中に覗かれるのは恥ずかしいものがある。化粧していない顔を、何十回見られていたとしてもだ。

覗いているのが彼氏なら、遠慮なく鼻に拳を打ち込んでいるだろう。

「アナタも少しは化粧したら。学生時代はまだしも社会に出てから勉強するのは大変よ？」

「お肌の曲がり角に来たら考えるよ」

彼女は自分の頬をさすりながら微笑んだ。

「曲がり角に来たら後悔するといいわ」

私はため息をつく。

彼女は確かに化粧なんかしなくても、長いまつげや、少し厚みのある唇、少しほりの深い顔。化粧なんかしなくても充分美人である。

鏡台の引き出しから、ピアスを一組選び耳に付けた。

「準備は出来てる？」

「とっくに」

ガスの元栓、水道の蛇口、部屋の電気。全て確認して二人で玄関を出た。

「あら、おはよう。レポートは進んだの？」

母屋の前で私の下宿の大家さんが掃除をしていた。

「はい順調に」

本来この下宿は人を泊めたりしてはいけない……という決まりはないが、あまり騒がしいのが好きではない大家さんに、私なりに配慮した言い訳が共同研究のレポート作成という言い訳だった。

「おはようございます、いい天気ですね」

彼女が笑顔で挨拶すると、大家さんもさらに笑顔で応える。不思議と、彼女の笑顔には曇るところが無くて、見た人全てが微笑んで返してしまう。そんな元気をくれる笑顔だったから。

「いってらっしゃい、気を付けてね」

「はー」

「はー」

二人で頭を下げて、大学へ向かう道を歩いた。

彼女は別に私とルームシェアをしている訳でもなければ、自分の家がない訳ではない。

家を出している訳でもなく、ただいつの間にか私の側にいて、大学生を送っていた。

知り合ってから、かれこれ数えて一年半。

奇妙な共同生活者（別に共同生活を望んでいるわけではないけれど、これが一番近い表現だと思う）、大学での友人であり出席番号の前と後。

あらかじめ断らせて貰えば――

これは私である所の加東景と、彼女、佐藤聖の事件とどういふほど事件ではなかったし、思い出

になるほど楽しかった訳でも、困難を共に乗り越えた訳でもない。もしかしたら私の記憶違いで、多少の演出はあるかもしれないタダのお話である。